

CASE 4

他者との関係性のなかで互いの変容を促す からだを使った「人を好きになる授業」

刈谷東高校（愛知・県立）



「リベラルアーツ国語」を開発した
兵藤友彦先生。全国各地での出
前授業も実施している。

与えられた役割で 話し合いに参加してみる

刈谷東高校昼間定時制の3・4年次に、週2時間設置されている学校設定科目「リベラルアーツ国語」。ある日の授業を見学した。

最初を実施したのは、「役割を決めて話し合う」というワーク。4〜5人のグループになり、じゃんけんで、積極的に意見を言う「イノベーター」、意見を調整する「調整役」、みんなを励ます「モチベーター」の役割を割り振る。提示されたテーマ「担任の先生を驚かせて喜ばせるために何をやる？」について、各自が役割を意識しながら話し合う――。役割を設定するねらいについて、担当する兵藤友彦先生はこう話す。

「本校には、3つの役割いずれの経験もしてこなかった生徒がいます。人を不快にさせないよう忖度し、話し合いの場に息を殺して『そこにいるだけ』『自分はこういう人だから』と諦めてきた。だから無理矢理にでも役割を試してみてほしいのです。意外とできるかもしれないし、自分には合わないと感じ

じるかもしれないが、やってみることが大切です。人はいろんな顔を使い分けて生きていく。その引き出しを増やしてほしいと思っています」

授業の後半は、各グループに「かぐや姫」や「浦島太郎」などの昔話が指定され、1分半の即興劇をつくった。ストーリーがあやふやな部分は情報端末で調べて補い、セリフや配役は自分たちで話し合って決める。制作と練習に与えられた時間は30分程度。動きが止まっているグループは見当たらない。最後はグループごとに劇を披露。全身を使って役を演じる生徒たちに、緊張感や固さはあまり見られない。独自にアレンジした展開やセリフに、観覧者からどっと笑い声が上がることもしばしばだった――。

「ストーリーや演技ではなく、答えのない問いに向かってみるまでつくるプロセスに意味があります」（兵藤先生、以下同）

まず、意識の向きを 他者へ向けることから

同校の生徒は6〜7割が不登校経験者で、外国籍の生徒も多い。「人が怖い、人目が怖い」と言う生徒たちが、1年

間の授業を通じて、人を好きになることができた大きな前進になるのではないか」。その思いで兵藤先生が実施している「リベラルアーツ国語」は、「聞く・話す・間をつくる」という3つの領域を学ぶ授業だ。

「『間をつくる』とは、人と人が単なる情報を送受信することではなく、別の考えをもった人同士がジャズセッションのように共振するようになるイメージです。生徒たちは社会に出たら、多様な人と協働していくことが求められます。学校は今、そんな社会とのギャップを埋めていく取組をしていく必要があります」

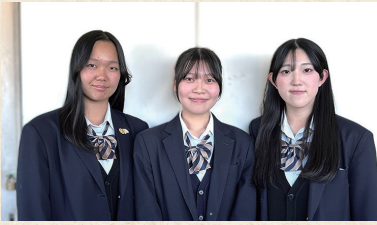
兵藤先生は顧問として同校演劇部を何度も全国大会に導くなかで、演劇レッスンが生徒の行動変容を促すことを確信した。そこから、「演劇のプロがいなくても教員ができる、演劇を用いた授業」を目指し、生徒の成長を促した演劇レッスンを編み直して「演劇表現」という選択科目を作った。さらに多くの生徒に提供するため、昨年度、必修科目として「リベラルアーツ国語」をつくり、兵藤先生は毎時間指導案をつくり国語科の教員5人と実施している。

右：授業前半、役割を決めた話し合い。この日話した「担任の先生を驚かせて喜ばせる」というアイデアは、後日クラスみんなで実行する予定。
下：授業後半の即興劇の発表。発表時間が余ると「あと10秒ある。つなげて」と兵藤先生。生徒はアドリブで演技を続けた。



1学期のテーマは「対一」の関係をつくること。2人1組で、お互いの指先で箸を挟む、背中合わせで立ち上がるなど、からだを使ったワークを行う（図）。「自分に集中的に興味に向いている生徒も多いので、まず意識の向きをクルッと変え、他者を発見することが必要。言葉によるコミュニケーションスキルの

生徒インタビュー



左：斉藤愛華さん（3年生）、中央：荒木莉杏さん（3年生）、右：竹内惺羅さん（3年生）

人間に興味が湧き始めた

私は初対面でもすぐ話しかけるほうです。でも、以前は相手がどう思っているか考えようとしていなかった。よくしゃべっていても、相手がどういう人か全然知らなかった。もっと言うと、自分が何を考えているかも意識していなく、目の前の出来事をただ見ていただけだったのかもしれない。この学校で「聞く」ことを覚え、人間というものに興味が湧き始めました。「リベラルアーツ国語」を通じてクラスの関係性がぐんと良くなり、今は誰とでもなんでも言い合えるという安心感があります。（竹内さん）

自分の気持ちを言葉にするように

学校そのものが怖いという状態でこの学校に入学し、がんばっている人々と関わるようになって、今はすごく楽しいです。最近、自分の気持ちを言葉にして伝えることが多くなったように思います。中学の時は思うように学校に通えずふさぎ込むことが多く、家族にも自分の思いをあまり言えずにいました。それで苦しくなっていて、ある日突然爆発しちゃうみたいなことがありました。今は、良いことも悪いことも言語化して家族に伝えています。溜め込むこともなくなり、すごく気が楽になりました。（荒木さん）

相手をもっと知りたい

中学時代に友達のつくり方がわからなくなっていました。でも、高校で目が合ったことがきっかけで友達ができ、相手の話を聞くことの大事さや、違うと思ったことははっきり言ったほうが良いことがわかってきました。コミュニケーションとは「相手を知ること」かなと思います。今、クラスの3分の1が外国籍の子で、お互いの言語を教え合ったり、自国の料理を持ってきたりみんなで食べたりするのがすごく楽しいんです。相手の言葉を理解したい、もっと話せるようになりたいと思っています。（斉藤さん）

取り入れている演劇レッスンの例

● 箸を挟んで立つ（1学期）

2人が目を閉じて割り箸をお互いの人差し指で挟み、声かけや合図なしで落とさないように立ち上がり、1人が箸の下をくぐるように回ったりする。

● ～代の娘とお母さん（2学期）

グループごとに決められた設定（10代の娘と母／20代の娘と母／40代の娘と母／60代の娘と母）で芝居を創作。発表直前に『4つの芝居をつなげて連続性のある物語にして』と注文をつける。生徒は前の発表の設定を引き継ぎ、その場で自分たちの芝居をアレンジしながら発表する。

前に、からだを使って他者を感じ取ることから始めるのが特徴です」
2学期はグループでのやりとりを練習する。即興演劇のレッスンから始め、短い芝居の創作にも挑戦する（図）。

人と話す楽しさが経験できる授業を

「即興は相手を見ないとできないものです。他のグループの芝居を見て、自分たちの芝居を臨機応変に調整するようなことにも挑戦します」
そして3学期は「一人」になって、本や言葉と出会う。最後は、日常生活を基に「私」を1分間のパフォーマンスにする。
「表現にはその人が出ます。それを共有することで、『困難を抱えているのは自分だけではない』とお互いに共感することが大切です」

生徒は「リベラルアーツ国語」について

「一番好きな授業」「楽しい」と口を揃える。4月の授業開始当初、相手を見ることや近寄ることに拒否感があり、簡単なレッスンもできない生徒が大勢いた。「こんなことができた」という小さな自信を積み重ね、話し合いや協働

ができるようになってきた。

4月から授業を受けてきた生徒たちは、「授業でイノベーター役をやって得意だと気づき積極的に意見を出すようになった」「これまで誰かが決めてくれるのを待っていた。今は自分のやることは自分で決めて動くことが増えた」など、それぞれ自身の変化を感じている。
「まず生徒と私、次に生徒同士の信頼関係をつくる。そのなかでのやりとりで、生徒がお互いに変わってくる。目指すのは行動の変容で、内面を変えるとは決まっています。しかし、関係性のなかで自然と内面も変わってくるものです」
こうした実践を踏まえ、ほかの高校や大学でも出前授業を実施している兵藤先生は、「このような授業が必要なのは本校の生徒だけではない」と言う。
「今、『話す』とはオンライン上のメッセージ交換のことで、対面で話すことは

実践のヒント

「リアルに話す」と言い、オンラインで『話す』ほうが気が楽なのだ、大学生たちも言っていました。そんな世界に生きているのか、と驚きました。どうすれば『リアルに話す』ようになるかと聞くと、『楽しければ』と。それなら授業でリアルに話して、たくさん楽しい経験ができるようにすればいいのではないかと、多くの若者にそんな経験ができる授業を行っていききたいと思います」

● 言葉を使ったスキルの前に、からだを使ったコミュニケーションを練習。それを楽しみ感じられるようにする。

● 一対一の関係性づくりから始め、数人のグループへと徐々に対象を広げ、最後は「自分」に向き合う。

● 教員との信頼関係が、コミュニケーションを学んでいくベースになる。

学校データ

1969年創立／昼間定時制課程・普通科／生徒数526人（男子245人・女子281人）／兵藤先生が顧問を務める演劇部は高校演劇の全国大会に何度も出場している。